

## 【シンポジウム・ポストモダンとシェリング】

## 司会報告

伊坂青司・伊東多佳子

「ポストモダンとシェリング」というテーマのもとに、仲正氏は「ポストモダンとシェリングの「無」の論理」、広瀬氏は「モダン・ロマン主義・ポストモダン」、山口氏は「ポストモダンとシェリング」と題してそれぞれが提題発表を行った。

仲正氏は、シェリングをFr.シュレーゲルやノヴァーリスといった初期ロマン派との関連で位置づけ直すとともに、神話的「無意識」というシェリングの問題設定から、ポストモダンの異同を検討した。また広瀬氏は、まずモダンを欲望追求の自由と絶対性の消滅として理解したうえで、ロマン主義には絶対性回復の契機を認める一方、ポストモダンについてはモダンの枠を超えるものではないことを指摘した。山口氏は後期シェリングに焦点を合わせ、とりわけ非同一的な力を本質とする「芸術」概念を軸に据えながら、カオスをはらんだ「絶対者」の概念について、ポストモダンとの接点を手がかりに検討した。それぞれの報告の後、提題者の中で特に「芸術」に絞って相互に質問がなされ、それぞれの提題者による補足説明が次のように行われた。

仲正氏は、ポストモダンがシェリングと同じ基盤に立ちうる

のかどうかという質問にたいして、ポストモダンはシェリングにみられる芸術についての哲学的表現よりも、むしろシュレーゲルやノヴァーリスらに見られる美の王国の実現というテーマを共有していること、そして初期ロマン派のこうしたポストモダン性をシェリングは共有していないことを指摘した。またシェリングにおける絶対者の美的直観に関する質問に対して、ヘルダーリンにおける美的直観が瞬間的であるのに比して、シェリングの美的直観は哲学的な言語表現によって持続性を獲得しているとした。

広瀬氏は、イギリス・ロマン派における「想像力」と「自己」の位置づけに関する質問に対して、コウルリッジに言及しながら、想像力が根源を求める力であるものの、それが個から出発しているために、自己の内面化によって対象から遠ざかる傾向があること、そしてそこに詩人の孤独というロマン主義的な観念が生まれたことを明らかにした。しかし同時にコウルリッジには、(人間を超えた大いなる自然の力)を崇高なる美とする側面もあり、この点ではむしろシェリングの崇高の美学に近いのではないかとした。

山口氏は、シェリングにおいて「絶対者」がいかに現前するかという質問に対して、シェリングが絶対者を「詩と哲学の融合」として捉えて、非体系的なものを哲学のなかで扱おうとしたこと、しかし『自由論』以降は非体系的なものを哲学体系のなかで扱うことへの迷いが生じたことを指摘した。また古典芸術とロマン主義芸術に対するシェリングの態度に関する質問について、シェリングは古典主義的なゲーテを評価するのに比して、内面表現を重視するロマン主義的なものについては涙を流させるだけというように、批判的であることを指摘した。

続いて、提題者間の討論を受ける形で、フロアーからの質問に移り、フロアーと提題者間で活発な質疑応答がなされた。

ここでは司会者として、質疑応答の内容を紙幅の許すかぎり可能な範囲で再現するように努めた。

まず最初に、「ポストモダン」とは何かをめぐって質問が出された。ポストモダン派はどのように自己認識しているのか、「ポストモダン」というグループ・ピングに妥当性があるのかという質問に対して、仲正氏は「ポストモダン」という言葉がそもそも便宜的な名称として使われ始め、ハーバマス周辺の近代合理主義を擁護する人々などは否定的な意味あいで使用することが多いと指摘した。またポストモダンの「脱作品化」という概念が、ロマン派の言語表現とどう関連するかという質問に対して、広瀬氏は、シェリングにおける哲学的な言語表現のパフォーマティブな性格と対照させながら、ポストモダン派のいう「無限の

対話」が、作品の相互作用を通して意味を創造する試みであることを指摘した。さらに話題は初期ロマン派の文芸理論へと移り、シュレーゲルのイロニーやヴァーリスの自然研究における *Erzähl* を、言語の比喩の運動としてどう考えたらよいかという質問に対して、仲正氏はそれらが自我の「構想力」(*Bildungskraft*)に発しながらも、自我の枠を超えるジレンマのなかにあるとした。

続いてフロアーからの質問は、ヘモダン、ロマン主義、ポストモダンという三つの概念について整理が必要だという意見が出され、改めてヘモダンをどう規定するのか確認が求められた。それに対して各提題者は、仲正氏が「理性的自我」を、広瀬氏が「啓蒙主義」を、山口氏が「歴史の進歩」をそれぞれモダンの特徴として挙げた。なかでも近代的な自我同一性をモダン理解の共通軸としたうえで、ロマン主義とポストモダンについて各氏がそれぞれ議論を敷衍した。仲正氏によると、フィヒテの絶対的自我はそれだけでは自己完結せず、シェリングにおけるように外部的な要素として未知な力にぶつかったが、ポストモダンは同一的な自我そのものを脱構築しようとするものだという。広瀬氏によると、近代において自我の絶対化によって絶対者が解体されるという逆説のなかで、ロマン主義は絶対者の回復を模索したが、ポストモダンは絶対性そのものを解体するものであるという。山口氏によると、シェリングは自我を真理の起点とするのではなく、自己の内なる予期せざるものを

介して神へという点で自我の解体という志向をその哲学のうち  
に有していたのであって、その意味ですでにポストモダンのな  
要素を持っていたという。

さらに質問は、現代哲学とポストモダンの関係へと展開して  
いった。ポストモダンのなかにニーチェの影響はどのような形  
でみられるかという質問に対して、広瀬氏は、ポストモダンを  
時代的な区分としては理解しないとしたうえで、モダンは現代  
にまで続いているという枠のなかでみると、ニーチェのモダン  
批判はポストモダンの言説にもつながっているとされた。さらに  
ニーチェの「神の死」にみられるニヒリズムとシェリング、あ  
るいはポストモダンがどう関わるかという質問に対して、各提  
題者はつぎのように答えた。仲正氏は、シェリングが真理概念  
をあくまでも哲学的に追究しようとしたのに対して、ニーチェ  
は自我も含めてすべての絶対性を破壊しようとした点では、ポ  
ストモダン性を持っていると指摘した。広瀬氏は、シェリング  
が絶対性を求めたのに対して、ニーチェは近代的自我への批判  
からさらに絶対性の断念へと向かったが、ポストモダンは世界  
を相対化して自己の差異化を楽しんでいるかのようであるとし  
た。また山口氏は、ポストモダンを汎論理主義の解体として特  
徴づけ、その特徴のなかにデリダの差延という考えをみること  
ができるとしながら、ニーチェのデュオニソスのなものはシェ  
リングの「根底」概念にまで遡れることを指摘した。

こうして提題者とフロアーとの間の質疑応答は、最終的にモ

ダンとポストモダンはどこで分かれるのか、自我の同一性とい  
うモダンの設定がはたしてポストモダンにおいては成立しない  
のかどうかという問題に帰着した。この問題に対して仲正氏は、  
ポストモダンはその意欲を示したにしても、自我として自己完  
結することをプロジェクトとして目指したかどうかの問題であ  
るとした。広瀬氏は、論理的であることがモダンの真理基準で  
あるのに対して、ポストモダンはそもそも問題設定の角度が違  
っていると指摘した。山口氏は、モダンの課題が自我の確立に  
あつたのに対して、ポストモダンは自我同一性の揺らぎという  
点で、近代的な自我のあり方と異なっており、この自我の揺ら  
ぎこそがポストモダンのであると締めくくった。

「ポストモダンとシェリング」という今回のシンポジウムの  
テーマが指し示すように、そもそもモダンとポストモダンの違  
いは何なのか、そしてシェリングはモダンとポストモダンの間  
にあつて、それらにどのように関連するののかといった問題につ  
いて、さまざまな角度から活発な議論がなされたが、時間の関  
係もあつて十分に議論を尽くすことのできない論点も残された。  
今後もしこうした議論がさらに続けられ、思索が深められていく  
ことを大いに期待したい。

(いさか せいし・神奈川大学)

(いとう たかこ・高岡短期大学)